

論文審査の結果の要旨

論文提出者 鈴木貴之

本論文は、現象的意識を物理的世界にいかにして位置づけうるかという「意識の自然化」の問題に包括的かつ詳細に取り組み、きわめて独自の解決をはかった意欲的かつ秀逸な論文である。意識的な知覚・感覚経験に現れる感覚的な質はとくに専門的には「クオリア」と呼ばれるが、それを物理主義的な観点から説明することはきわめて困難である。それゆえ、クオリアないしそれをはらむ現象的意識を自然化する問題は、ときに「意識のハードプロブレム」と呼ばれる。本論文はこの問題に対して、既存の諸説を網羅的かつ徹底的に吟味してその成果と問題点を明快に整理し、それを踏まえて「意識の表象理論」という独自の内容をはらんだ見方を提示し、既存の諸説を乗り越えた一つの有力な立場を確立したといえる。

各章ごとの内容に即して言うならば、第一章では、本論文で取り組む「意識のハードプロブレム」がどのような問題であり、なぜ深刻かつ重要な問題であるのかを、現象的意識の自然化を妨げるようにみえる三つの議論、すなわち「思考可能性論法」、「知識論法」、「錯覚論法」の検討を通して、明快に提示している。

第二章では、意識の自然化をはかる物理主義の諸立場のうち、意識の実在性を否定する「消去主義」と、意識の物理主義的な説明を不可能としつつもその不可能性は物理主義的に理解可能だとする「タイプB物理主義」をいずれも受け入れがたい立場として拒否し、意識を物理的なものに還元する還元的物理主義が意識を自然化する唯一の道であることを説得的に論証している。また、思考可能性論法に対して、思考可能性が必ずしも形而上学的な可能性を帰結しないことを説得的に論証して、この論法が意識の自然化の脅威にならないことを示し、意識の自然化を妨げるようにみえる議論の一つが巧みに克服されている。

第三章では、意識の自然化をはかるうえでもっとも有望なのは、クオリアを意識経験の内在的な性質ではなく、それによって表象される（＝志向される）性質だとする説、すなわち「志向説」であることを、既存の志向説に重要な洗練を施しながら、明快に論じている。そしてこの志向説と志向性の自然主義的理論を組み合わせることによって意識を最終的に自然化しようとする理論を「意識の表象理論」と名づけ、その具体化と擁護を行うために、まずその理論が直面する根本的な問題を鋭く抉りだして、列挙している。

第四章では、前章で列挙した諸問題に対して、意識の表象理論による解決が与えられる。まず自然主義的な志向性理論として、既存の因果理論や目的論的理論を排して、表象の志向的内容がもっぱらその表象の利用のされ方によって決定されるとする「消費理論」を提唱する。そして表象を他の表象を介さずに行動へと利用される本来の表象とそうでない派生的表象に区別し、本来の表象がそれ以上の何か（メタ表象や言語化など）を必要とせず、そのまま意識経験にほかならないというきわめて独自の主張を展開する。さらにこのよ

うな意識経験は世界を主体の関心に即して分節化するものであり、従って経験される性質は主体の関心から独立な物理的性質には還元できず、それゆえにこそ錯覚が可能であることが論証される(こうして錯覚論法も克服される)。本章は本論文の中核となる章であり、意識の自然化についての著者独自の「ミニマルな表象理論」が非常に刺激的に展開されている。

最後の第五章では、ミニマルな表象理論によって人間以外の動物やロボットなどに関する意識の問題にも解決が与えられうることが論じられるとともに、残された知識論法への応答が意識経験の表象内容の「非概念性」を論拠にして巧みになされる。

本論文の独創的な点をまとめれば、第一に、自然主義的な志向性理論として純粋な消費理論を提唱したこと、第二に、経験される性質は物理的性質に還元されず、もっぱら意識経験によって表象されるだけの非因果的な性質だとしたこと、第三に、それにも関わらず意識経験のほうは物理的ものに還元することができ、それゆえ意識経験とともに経験される性質(つまりクオリア)も自然化されること、以上の三点にまとめることができる。

本論文は、意識の自然化をめぐる諸説の徹底的な吟味およびその解決のための独自の有力な立場の提唱という点で、きわめて高い評価に値するものである。本論文は、鈴木氏が意識の自然化という科学哲学上の重要な問題において第一線の力量を有することを十分示したといえる。よって、審査委員は全員、本論文をもって学位取得のために十分であると判断した。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。